

“ Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? ( Maria-Anna Bäuml-Roßnagl ) ”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

## 世紀転換に向けて新たな学校を

時代に即した学校教育の人間学的基底を求めて

マリアアンナ・ボイムルロスナグル

### Eine neue Schule zur Jahrtausendwende?

Leitmotiv für eine zeitgerechte anthropologische Grundlegung der Schulbildung -  
Maria-Anna Bäuml-Roßnagl

どの雑誌に載ったのかということ（掲載雑誌ナンバー）

注の記述をひくこと（引用部は明らかに）

#### 1. 常に前進している存在としての人間

ブランコの上の子どもは、前後に揺れる動きの中で自らも揺れながら進んで世界との調和を経験します。「ある状態から次の状態へと移行する際の弾力（übergängliche Elastizität）」（H.Kükelhaus）は人に自己と調和しているという感覚をもたらします。もしその人が「揺れ動きながら」リズムカルな動きにおいて世界と関わり合うならば、彼はこの世界との感覚的・感性的な調和において自己というものを体験することでしょう。H.Kükelhausはこういった人間学における根本条件がどこから由来するものなのかということを経験する様々な自然の経緯にそって示しています。

「上がると下がる、持ち上がると沈むといった対照的な動きは、ブランコの振り子運動のなかで互いに互いの動きを原動力として行われます。ですから、こうした認識との調和において私の取り組みは、揺れ動く振り子が上昇する力と加工する力を互いの原動力としているのと同様に、主体と客体としての振り子を互い互いの芽生えを促進するものとなります。」<sup>1</sup>

また、人間が発達してゆくうえで、最も難が少ないのは「自分自身の全体的な身体との振り子運動をしながら、すなわち自身の全体としての身体と調和を図りながら順々に段階を上っていくことです。いかなる方法であってもその人が振り子運動をしつつ、揺れ動きつつ、軽快な足どりで進むことが最も早く成果を挙げます。それぞれの歩みは、そうした歩みにおける振り子運動のなかで、die Gelenge（間接・ジョイント・つなぎ）を通して器官の中に「プログラム化され、これによって時間的に前後しているそれぞれの歩みが「彼の」足取りとお互いに調和したものとなるのです。人間は、身体的な意味においても、精神的な意味においても、前進しながら彼自身の生活を進めて行くのです！<sup>2</sup>

また、こうした人間が人間としてその生命の実現を図る方法としてのリズムカルな運動は、教

1

2

“ Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? ( Maria-Anna Bäumli-Roßnagl ) ”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

育の取り組みにとって、その理論や行動を導くものとなるべきでしょう。このように人間の存在をその体内器官に象徴して捉える捉え方、すなわち人間の存在のあり方を振り子運動に求める人間像は、人間に適した教育プロセスの創造に向けても多くのイメージを内包しています。自身の全ての身体を振り子のように揺れ動きながら、これと同時に人間は、自分と世界の間、自己のアイデンティティーと連帯感の間、また、自己に関する認識と社会的な認識、世界に関する認識の間を揺れ動いているのです。自己実現へと導く人間的な行動は、常に調整されながらひとつの行動へと落ち着きます。それはまた他者や世界の物事と「上手く」関わらせるものです。

教育 ( Bildung ) が子どもたちの生活に役立ちたい、また役に立つべきだというのであれば、教育の取り組みは常にその源となる生活の法則を再帰するものでなくてはなりません。今日私たちは私たちの時代の経験に応じた「Anthropo-Pädagogik ( 人間的な教育 ( 学 ) )」<sup>3</sup>を必要としています。「2000年に向けての教育 ( Bildung für das Jahr 2000 )」とは、すなわち教育を世紀の転換に向けて新たにとらえ直すということです：以下では、2000年に向けて「Anthropo-Pädagogik ( 人間的な教育 )」に求められているものとその中心的な考え方について幾つか解説したいと思います。その際、今日教育実践や教育制度、Bildung 理論についてなされている様々な議論の観点を器官学に基づいて理解することによって、「人間的な教育 ( 学 )」の方向性を提示することに取り組もうと思います。

## 2 . 時代に即した学校教育の人間学的基底を探る上での中心的な考え方

**感性的な学習か抽象的な学習か** といった議論は何らオルタナティブを導くものではない。**むしろオルタナティブは、各々の学習を互いに補完しあうものとして「ひとつの」教育の道に位置づけて行うことである。**

みなさんは西洋の学校教育史における偉大な教授学者 J.A. コメニウス ( Johann Amos Comenius ) より次の有名な人間形成に関する原理を知っていることでしょう。

「人間はできるならばできるだけ多くの知識 ( 英知 die Weisheit ) を本からではなく、空と地あるいは樅とブナとを観察するというように、物事を観察することによってそれを創造すべきである。... こうした物事は人々の感覚 ( Sinn ) に理解させ、なじませなくてはなりません：つまり、目には見ることができるよう、耳には聞くことができるように、鼻には嗅ぎ取ることができるよう、味覚には味わうことができるように、触覚には触れることができるようにです。」

また、コメニウスは初めての学校教育用専門絵本「世界図絵 ( "Orbis sensualium pictus" )」を創り上げたとき、この「全世界 ( 雅語 地球およびその生物のすべて ) を描いたもの」は単に「学校教育が整えられるまでの目下の代用品」になるであろうということを、すでにはっきりと自覚していたのでした。それは17世紀のことでした。しかし、実際の現実や人々が感性によって受け止める現実の変わりに「学校教育が整えられるまでの目下の代用品」とされた、その絵や記号、絵や媒介物が、学校教育学者の間で今なお生きているのです。そして、そういった本当の感性的な経験が私たちの学校教育に占める時間・占める位置は、私たちが本来人間形成に関して願い、求めているよりもはるかにわずかなものです。感覚・感性から意味 ( Mika - の獲得・創造 ) へといったコメニウスによって唱えられたその道のりはこの間はるかに短縮されてきています。子どもたちに直観を通して物事を捉えることと世界観を育むことの統一を図ること、事実

“ Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? ( Maria-Anna Bäuml-Roßnagl ) ”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

体的なものの方考え方と言語的な見方考え方の統一を図ることは、今なお学校教育にとって難しいことです。

しかしまた、私たちの教育制度においては、少なくとも 80 年代の初頭以降学校教育が確実にその傾向を変換してきているということを確認することができます。あちこちで「これまで固く閉ざされていた合理性を絶対視する幻想が雪解けを迎えている」( M.Wagenschein ) のを確認することができます。学校教育が子どもたちの感覚や感性を度外視し、遠ざけているという、学校教育における感覚・感性の喪失の問題は、今日では教育理論家やレールプラン作成者、そしてとりわけ子どもたちの親や教師たちによって、はっきりと捉えられています。したがって、新しいレールプランにおいては、子どもたちの直観作用を重視するよう、また、授業や学校生活の創造においては子どもたちが目にすることができ、具体的にはっきりとわかるということに重視するようといった要求が、明確なかたちで高められていました。また、この間子どもたちに感覚的・感性的な資質を内面化させ、そうした資質を確かなものとして定着させるには、子どもたちが彼らの生活空間における様々な学習対象を、実際に経験し、感じ、それに触れ、匂いを嗅ぎ、味わい、目で見、耳で聞くことをしなくてはならないといった洞察も次第に強められてきています。その結果、授業見学や学校以外の場所における子どもたちの生活の場・学習の場といったものが新たに評価を得ています。

今日、人間形成をめぐる求められていることは、大人と子どもとが共に彼らの生活世界における様々な物事や実態、そこでの問題や希望に取り組むことです。私たちの生活世界におけるそうした諸々の現象は、なによりもまずは感覚や感性、あるいは肉体を通して認識されることが望ましく、「媒体」を介しての認識はその次なる段階としてはじめて求められるものです。そうした感覚や感性の活動においては、子どももそして教師もまた全体的であること ( ganzheitlich ) が要求されます。すなわち、そうした感覚や感性を用いた活動においては、彼らは自身の内なる世界と彼らが存在している共同世界、そして彼らを取り巻く環境世界 ( menschlichen Innenwelt, Mitwelt und Umwelt ) とを認識しようと、その感覚・感性を研ぎ澄まし、それらを敏感に働かせるのです。今日のように「客観的な方向性を失った」といわれる時代にあっては、ただ大人たちが、自分たちの今あるこの生活世界において俗に「実際」(「本物」「客観的なもの」) といわれているものが一体なんであるのかということに新たに問い直すことによるのみ、日常における事物との経験 ( Sacherfahrungen ) を感覚・感性的な経験 ( zur Sinnerfahrungen ) へと導くことができるのです。子どもたちはしばしば「すでに、成長した」大人の教師たちにその道を示してくれています。

**今日の生活世界に鑑み、その意味を新たに問うことを学びということと教育 ( 人間形成 ) の過程を通して仮象の世界を浮き彫りにするということ ( 暴露すること )**

ギュンター・アンダース ( Günter Anders ) は、すでに 60 年代に「現代的な AV メディアを通して各家庭に届けられる世界によって、人間は単純で愚直な存在にされてしまう」ということを指摘し、またこれについて人々に警告を発していました。このとき彼はメディアによって人々が単純化され、愚直化されてしまう一例として 1955 年 5 月 7 日の水爆事故を取り上げ、それについて報道されたものをビデオで幾度となく再生してみせましたが、結局それは何度見ても事態をより明らかにするものではありませんでした。この頃より世論において、人々が日常経験することと現実に生活を営むことの間にある種の乖離があるということが、次第に強く言われるようになってきました。以降これまでの長い間には、人々の「認識が危機的状況」にある、つまり人々が容易に現実世界を認識し得ないといった状況に対する危惧から、放射性降物がそのいい例であるように、今日では私たちは自身の生命を脅かす事態を、もはや自身の人間的な感覚・感性を

“ Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? ( Maria-Anna Bäumli-Roßnagl ) ”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

もって認識し得ないという批判的な現象に至るまで、様々な問題が人々の口に上ってきています。こうした人間の認識をめぐる危機的状況は、私たち人間をこれに変わる新たな生き方へと向かわせるものです。

「こうした、実際に直接危険に触れることもなければ、自らが体験してみるという冒険をすることもなく、基準から外れたことをする危険もなく、すべて抑えられたなかでもたらされる、しつらえの、いかなればすべてが加工された代用の生活においては、生き生きとした多様な生活というものは断念されてしまっています。」

すでに、子どもたちが自らの身体や感覚・感性による認識を通じてこの世界と知り合うのは、子どもたちがこの世界を知りゆく中でも極々限られた部分でしかないのです。そうした経験が「知識によって置き換えられて」しまっているのです（H.Kükelhaus）そして私たちはみな引き続きこの「置き換えられた世界（代用の世界）」、さらにいうならばひとつの仮象の世界に生きているのです。このことは教育学に、そして教育学者に兄を意味しているのでしょうか？それは、本当の意味での現実の経験といった視点が、今日の現実世界における多様な次元を考慮する視点とともに習得され、身につけられなくてはならないということです。そして、それは大人たちと同様、子どもたちにおいてもです。ですから、例えばザッハウントーリヒトヒいては各教科教育との関連でいうと、専門科学や各教科の知見による解釈モデルと同様に、何か神秘的な感じを覚えたり、子どもたちの心情に沿って考えたりすることも「活発に行う」ことが重要ですし、また、専門的な解釈ができるということと同様に、子どもたちが今の現実に鑑みながら希望を膨らましたり、夢を描いたりすることを真剣に受け止めることが大切です。子どもたちにおける個々の主体に結びついた問いや見方・考え方もまた、客観性を重視する専門科学の諸関連と同様に意味と意義とを備えたものです。また、俗に「客観的」だといわれている科学の世界やその解釈のひな型であっても仮象の世界で在りうるのですから。

このように考えてくると、次の点についてはっきりと自覚しておくことが大切です。すなわち、「日々私たちの家庭に届けられる世界」もまた、輪や師たちの世界の一部であるということ、しかもそれは私たちの総合的な生活世界のたったひとつの「部分」にすぎないということ、そして、それというのは教育を通して意識的に子どもたちにおけるその他の部分の世界の経験へと導かれなくてはならないものである、ということです。このように相互に関連付けた見通しをもつことによって、はじめてひとつの全体的な（「完全な」）世界像が生まれるのですから！

### 教育の関係における大人（Erwachsensein）の位置付けや役割を今一度明らかにすること

もし大人や教師が自身の位置づけや役割をただただ「子どもの側から von Kindern her 」しか捉えていないとしたら、それは誤った理解の仕方だといわねばならないでしょう。（こうした教師側の善意が往々にして短絡的・近視眼的な「子ども中心主義」を容易に起こしてしまっているように！）特に今日のような「ポスト反権威主義教育（"post-antiautoritären Pädagogik"）」の時代にあっては、未だ「成長しきって er-wachsen」いない大人や、教育関係において何ら大人の見方・考え方に務めようとしな（あるいはそれができない？）大人と共に成長するということが、子どもたちにとってもまたどれだけ多くの負担をかけるものであるかということが明らかになっています。大人たちが方向性を示さず行動をしてくれるのを懐かしみ、それを求める気持ち、あるいは、大人たちが「秩序や方向付けを成し遂げてくれる」ことを求める要求は、今日小さな子どもたちや基礎学校の児童たちによって十分に表明されています。ですから、もし私たちの社会が青少年における「右翼的反動勢力」への傾倒を嘆くのならば、大人たちにおいて（青少年の模範となるような）有意義な活動や働きかけ・有意義な生活の創造がなされ得なかったということが原因として言及されなくてはならないのです。

“Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? (Maria-Anna Bäumli-Roßnagl)”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

青少年たちは大人たちが彼らの生活経験 (Lebenserfahrung) や生活知 (Lebenswissen) をもって「Vorweg (進むべき道)」を示してくれることを求めているのです。それというのは、彼らが自身の生活を創造してゆくなかで、大人たちに倣ったり、自身のそれと比較したり、彼らとそれについて議論することを通して成長することができるために、です。教育的な関係性や営みにおいては、子どもたちがそれを倣うために、あるいは彼らがそれに「自身の」像をもって対置するためにも、子どもたちに行く手を示す「模範」といったもの (“Vor” Bilder) が必要不可欠です。子どもたちが自身の感覚・完成をもってこの現実世界を捉えるということもまた、子どもたちが今日の世界と関係を築いていくうえで、「コインの一面」をいうにすぎません。そのもう一方の側面は、子どもたちがこの現実世界と取り組むということにあります。そしてこれには他者の現実世界に対する解釈も含まれています。

“Kunde”という概念もまた基礎学校の100年にわたる伝統のなかでこのような意味で理解されています。これによれば“Heimatkunde geben”はただ「物事について教授する」というのではなくして、現実世界について「Kunde (学) を与える」ことを意味しています。このような郷土科においては「学」を「与える者」自身の解釈、すなわち「与える者」の物事に関する理解や世界に関する理解は児童たちに受け継がれます。近年私たちはむしろ教師と児童の間での交換作用、すなわち (哲学や人間学、心理学、社会学における、相互主体性に関する今日的な理論に鑑みながら) 教師と生徒における「相互活動」や両者の「統合」を図ることを強調しています。教師と生徒とが互いに向かい合うこと、互いに話し、考え、行動することは、教育と教授における基盤です。このような他者とのやりとりの中で私たち人間は意味や意義、つまり世界における私たちについての意味や意義、世界における物事についての意味や意義を経験するのです。さらにこのことは、今日私たちが暮らすこの時代にあっては、世界を解明し、解釈する際にそれができないということに耐えることを学ぶということをも意味しています。このことはとりわけ大人たちについていえることです。世界を解釈するということが、感覚や感性をもって世界を捉えるということにおいては、私たちよりも子どもたちのほうがはるかに勝っているのです。

**民族間の道しるべとしての異文化教育 nicht ohne Gespräch zwischen den Generationen (意味不明??)**

H.Glöckelはこの雑誌 (Pädagogische Welt??) にロシアの学校と大学を訪れた研究旅行に関する短い報告を載せていますが、彼はその結論において、人間が開かれた存在であること (offenheit) と人間に会話能力があること (Gesprächsbereitschaft) を人間固有の才 (<人間にとって本質的に役立つもの) として強調しています。

「旅の移動のなかで、私は老人たち、なかでもユダヤ系とドイツ系のふたつの系統を引き、私に戦時中の政治的弾圧の中での彼らの予期せぬ運命について話してくれた老人たちとの、長く、心の通った会話について考えました。旅行中私の世話をしてくれた人々と私とは互いに対する感謝の念や好意の気持ちで結ばれていました。彼らは私がロシア民族との間で新たな関係を築くのを助けてくれました。私はこれこそが、今回私が得た専門的な洞察やその他の洞察とならぶ、今回の滞在における何よりの収穫だと考えています。それだけでもこの旅はとても価値あるものでした。」

民族と世代の問題は、その時代時代における世界各国の人々の暮らしやそこでの様々な生活条件に関する問題であり、それゆえ唯一文化間の「関わり」を示す像としてのみ現れてきます。こうした民族間、世代間相互の関連に関する問題に関しては、年々多くの人々、社会的責任を担う様々な教育機関が、異文化間における生活の課題、生存の課題として真剣に受け止めてきていま

“Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? (Maria-Anna Bäumli-Roßnagl)”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

す。J.Zimmer と彼の研究グループは 1980 年から 1985 年にわたって実験校においてモデル実験を行い、その事例をもとに実際に学校といった生活世界において異文化教育 (interkulturellen Erziehung und Bildung) に取り組んだときのチャンスと問題を探求し、結果「異文化教育として求められていることに対して、学校内でのカリキュラム改革が追いついていない」との結論に至りました：

「そもそもの仮説は、異文化教育は本質的にはカリキュラムの枠組み(Curricula Raum)の変更を経て果たされるであろう、というものでした。しかしながら、実験校における異文化教育導入・推進への取り組みは、むしろ学校という教育機関そのものが相異なる諸文化間の文化的価値や問題に通じる目標設定に対してそれを容易に行かせない状態にあるということ、そしてそれにゆえに、私たちがこの取り組みの開始時に思っていた以上に、幼稚園や学校における内的な改革や、開かれた学校計画と開かれた授業、共同性を重視した教育、近隣の学校同士での交流の開発といった問題が強く視野のなかに押し出されねばならない、といったことを示していました。ここからは特に重点を置くべき点として、調和よく組み合わせられた二言語教育 (koordinierten zweisprachigen Erziehung) に向けてその構想に取り組むことになりました。その際、実験校でのモデル実験の取り組みと、開かれた授業を実際に実践しようとする、あるいはまた、学校間の連携の開発を促進しようとする、教師や学校教育関係者の改革に向けての熱心な取り組みとの間には、ベルリンにおいてそれが顕著であるのみならず 多くのケースにおいて幾つもの共通点 (接点) があったのでした。」

(他者や異文化に対して +身歌) 広く開かれていること、また、それを受け入れること、向かい合い歩み寄ること、(単なる間に合わせに留まるのではなく、) 互いによき “パートナー” として生活することを試みること：異文化教育においてはこれらの点も課題になってきます。ですからいわゆる「文化的技術 (kulturtechniken)」と各専門分野における今日的理論の習得は、これらの課題に準じて体系的に配列されています。もちろん、こうした取り組みは、そのための土台として開かれた会話の基盤が整えられることによって、初めてそれぞれの人間にとって有意義なものとなり得るものです。異文化教育のモットーとしての「共に生き、共に学ぶ」ということは、したがって学校やその教室といった閉じられた空間の内に留められてはなりません。そしてこうした意味においては、何によりもまず大人 (成人) 世代が、偏見にとらわれないこと、他者や異文化との間における摩擦や葛藤に対処できる資質や能力を備えること、異文化に対して敬意を払うこと、また他者と共同・連帯して行動することを自ら学ばねばなりません。大人がそれを阻まないとき、子どもたちはこれまで以上に直接的に異文化との対話を進めることでしょう。

**身体を教育における陶冶材として認めること それは、大人と子ども両者にとっての教育の課題です。**

また、この間教育学の様々な潮流やその思考モデル・実践の構想が取り組んだことといえば、子どもたちを「教授の対象」とみなし、彼らに身体的な基盤を持たない知性や心的な深さといったものを無視した情緒、また、子どもたちの気持ちに根ざすということが無視した業績といったものを推し進めることでした。今日では大人も子どもも、教師も生徒も一面的にただただ業績のみを重視する文明の強烈な吸引力にさらされています。そして、こうしたなかには、人間が何かに取り組み、それを成し遂げる能力が人間の身体と結びついているということもはや認められていないのです。物事に取り組みめない、物事をなし遂げられない青少年というのは、このような社会的背景をもつ時代の教育の産物なのです。

このように近年ではとりわけ医師や心理学者が、業績を拒否する運動の第一歩として (ぎりぎ

“Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? (Maria-Anna Bäumli-Roßnagl)”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

りの!)一面的な身体と精神の活用、あるいはまた誤った肉体と精神の活用に対して強く警告を發しています。また、「各分野の(“jeder Provenienz”)」の教育学者が、子どもたちにおける学習と生活、思考と身体機能(‘leiben’)はいかに密接な関係にあるのか、どのように両者が補完しあってひとつの全体をなしているのかということ、また、子どもたちにおける頭と心と手は互いどのような状態にあるのかということ、を熟考しています。このように身体は新たに教育学の課題となり、大人と子どもとが共に直面し、両者に共に該当する課題として、新たに人間形成に求められるようになりました。

人間の身体は「特別な特徴・様式」を備えたものです(B. Waldesfens)。また、教師や子どもたちの親、養育者(Erzieher)がただ青少年に「教え込み」さえすればよいという、人間に即した教育内容(Bildungsinhalt)というものはありません(ここにはなんと教育学の日常的な会話における誤った考えや行動といったものが浮き彫りにされていることでしょうか)。大人も子どもも両者共に常に“全体”として彼らの身体の中に存在し、またそのようにして教育の取り組みの中心に位置付くべきです。自己との経験や事象との経験は、社会的な経験と共にいずれも同様にして身体的な経験を通して伝達されます。(わたしたちは、「される」といいますが、これがそのまま正しいのです!)「自身の身体」をもって教育の現象の中に取り組むことは、実践家としての教育学者に有効であるばかりでなく、研究者としての教育学者にも有効です。教育の研究プロセスにおいてもまた、研究者は身体をもってそれに取り組まねばなりません。これについては、とりわけ教育現象学が熱心に取り組んでいます。

もしも学校における子どもについて、あるいは家庭や公的な教育空間での子どもについて、何かしら有効なことを認識し、それについて述べようとするならば、(ただ)机に座っているだけではそれはなし得ません。もちろん「緑の机 grüne Tisch」でならば美しいモデルを開発することもできましょう。しかしそのように生み出されモデルの大半は、実際に具体化するには程遠く現実からかけ離れたものばかりです。それゆえに現象学的な教育研究は日常世界における教育に関わる諸々の「現象」に端を求め、そこから発するのです。つまりは、人が「目にしている」もの、そして、例えば「子どもはこうあるべき」といった理論的な構造からではなく、そこに現れている現象に糸口を求めるのです。「次世代に向けての」訓育と陶冶に関する改革教育学的な要求は、それらの要求が、身体をもって結ばれている教育学的関係の中での大人と子どもの経験からすっきり具体的に(「現象学的に」 原文)捉えられたときにこそよいよその効果を發揮するのです。

「身体を獲得する場」としての教育の場(Bildungsstätten)

Hugo Kükelhaus の「感覚・感性の發揮・発展に向けての経験のフィールド」より2・3の事例

- 写真1 : Hugo Kükelhaus の「感覚の發揮・発展に向けての経験のフィールド」(Nürnberg 1989)における「足で感じるコーナー(ステーション)」
- 写真2 : シンポジウム「全ての感覚をもって学ぶ」に設けられた、体験空間「目で手で足で触れる」における「足で感じる道」(Prof.Dr.Bäumli-Roßnagl/München 1990)

異なる地面の上を裸足で歩きます。その際、足の裏を通して地面が様々な形態からなっていることを感じとり、自らの器官が全体的であるということを経験します。これが「足で感じるコーナー(ステーション)」に求められていることです(前頁写真1と2を参照)動いて、また動いと、回数を重ねるほど、また熱心にやればやるほど、よりよい結果が生まれます!

“ Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? ( Maria-Anna Bäumli-Roßnagl ) ”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

「設置された全てのコーナー（ステーション）はひとつの巡回路をなしており、各コーナーはそれぞれ異なる材質でできています。吸音材の区間では、衝撃吸収用のクッション材の上を歩きます。ここでは、叫び声が壁に吸収されるように、一步一步歩くたびに沈みます。この区間のあとには、足は起伏に富んだ足に心地よい石の表面を捉え、以下レンガ、陶磁器の板、厚い木の板、毛糸を編んだもの、織布を順に捉えてゆきます。

コーナーの組み立て方は、建築物一般にそうであるように、あらゆる段階や種類の学校で共有されるものです。その際重要なのは、人間が自身を元に戻す、再生するということです。（幼稚園、療養施設、病院、リハビリテーションセンターなどなど）ですから、これを計画する際には、その取り組みは、可能な限りこうした人間の器官によって根拠付けられた前提条件を地表面の創造や空間内の段差割りに十分生かす、という方向に導かれます。

子どもたちは、まだ私たち大人が機能的な活動として捉えていないところにおいてもまた自身の運動の要求を実現しています。地面に設置された音を奏でる棒（Klangstäbe）は大人たちによっては音出し用のハンマーで直接的に「働きかけられる」ことでしょう。しかし、子どもたちにとっては、それは全身を動かして遊ぶことに向けての刺激です（写真3・4参照）。これと関連して、学校における運動教育の課題においては、私たちの文明化し、機能化した環境における「物質」と「体験」といった課題に対して、子どもたちに全身を使った経験と事象との多様な出会い・交わり方が活発になされるよう、配慮すべきです。校内の、あるいは校外の「自由」なグラウンドにある遊び場やスポーツ広場は、こうした観点から創造的に作り変えられる必要がありますし、それはまた広く開かれたかたちで教育学的に支援される必要があるでしょう。大人も子どもも今日では再び全ての感覚器官の運動要求を発揮すること、とりわけ文明によって狭められたステレオタイプの活動が「あらかじめ用意されている」ところにおいてもまた、それらを発揮することを目標とした学習をすべきなのです。

「その子どもは「私たちがアウトバーンを歩くとき何を経験したか」ということを実際に経験するために、およそ半日あるいはそれ以上の時間、ひとつの環境の中に滞在することを強制されました。過程を明らかにする状況の相違というものが閉ざされたがために、彼の感覚器官は要求されず、これによって彼は疲労しました。この子どもにとって、それは彼の足が必要としたことではありませんでした。むしろそれ以上にひどい結果をもたらすものでした。なぜなら、この歩くということは、この他すべての足による経験がそうであるように 子どもがその感覚器官を発達させる上でその基盤となるものだからです……。私たちは、子どもは唯一自身の運動を通してのみ世界を経験するのだということを、はっきりと自覚しておかねばなりません。なぜなら、その中にはそもそも子どもの胚が生命を継続しようとする動きが生じているからであり、子どもの運動の形式に関してはその子どもの胚の生命が子どもに先行しているからです。この誕生以前の生命の生まれた後のかたちは、子どもの運動遊戯にみるように、段差があり階段があり、彫刻のように刻まれた床の上には迷宮のように多くの部屋が設けられ、といった、人工的な環境を求めています。

子どもの足の機能と、すべての感覚器官の発達にとっての足による経験の質というものをすっかり誤って捉えてしまうことは、こうした要求に対応するとして学校を建てる時に足洗い場の予算に膨大な資金を投じてしまったり、あるいはまた、子どもというものは一体どれ位のスケールでただ単に「頭」で学ぶのではなく、その運動システムのリズムや彼の感覚・感性を通して学んでいるのかといった視点を妨げる、というような結果を招いてしまいます



## “ Eine neue Schule zur Jahrtausendwende? ( Maria-Anna Bäuml-Roßnagl ) ”

「世紀転換に向けて新たな学校を？」M.-A.ボイムルロスナグル

子どもの遊びや学校における体育の授業（かつては「身体教育」と呼ばれていました。）にバランスをとるための遊具／教具があります。「バランスを保つ」あるいは、再び「バランスを取り戻す」ことは、私たちに自らの生命を実際に自身の身体的な感覚器官の中に呼び起こします。しかしまたこのようにして身体的な感覚器官の中に喚起された生命は、精神的な感覚にも移行しますから、これによって私たちはまた精神的な感覚の中に自らの生命を呼び出すということになります。このバランスは、H.Kükelhausによれば私たちが自身を順当・適応させることと調整させることとして捉えられていますが、この他身体治療法として用いられる場合には、バランスは「体全体の状態を最高の状態に促進する生命の遊び」といった意味において捉えられています！つまり木製の動く半球体の上にバランス板を乗せ、その上に乗ってバランスをとるということは、単にいわゆる「ボディーコントロール」に取り組むということとは何ら関係ないのです。むしろ人々はそうした半球対を利用して作られた状況や回転盤の上で、「自分自身とのバランスを得る」という心地よい感情を自覚的に感じ取り、体験するのです。このように遊びの方法をとりながらバランスを得ることに取り組むことは、単に身体や肉体といったレベルを拓くのみならず、調和的な生命の遊びとして心や精神といった深い次元をも拓くのです。（写真5・6）参照

写真3：大人はハンマーを用いて「音を奏でる棒」（巨大な鉄琴のようなもの）を「操作（bedienen）する」という、一面的な動きをします。

写真4：子どもは「音を奏でる棒」の上に乗って全身を用いた遊戯運動を創造します。

写真5：「自分自身との間、世界との間でバランスを得る」ことを経験するための用具としての動く半球体

写真6：自分自身との間で、また他者との間でバランスを得ることは、集団での遊びのなかで練習することができます。

この論文に掲載された記録写真は執筆者の個人が記録したものです。よって本記録写真の利用には執筆者の許可の下においてのみ行われるものとします。